

令和元年度 第1回土橋自然観察教育林連絡協議会議事録

開催日時 令和元年12月4日(水)18:30～21:00

開催場所 厚沢部町図書館会議室

出席者

所属	氏名（敬称略）	所属	氏名
協議会員	須賀 貞 樹	教育委員会主幹	三 上 光 憲
協議会員	鈴木 晃 子	教育委員会係	富 塚 龍
協議会員	高 橋 のりえ		

事務局「29年度以降、30年度は協議会が開かれなかった。この点について謝罪をしたい。開催しなかった期間の情報は協議会の皆さんに全く伝わっていなかった点も含めて反省している。Aコーディネーターが退職した後、平成29年度はBコーディネーターが9月まで居た。11月から3月まではCコーディネーターが居た。その間、12月に一回協議会を開催した。平成30年度の4月からコーディネーターは不在となっている。募集は続けているが、まだ配置に至っていない。関係機関に声をかけているが、まだ見つかっていない。コーディネーターが居る前提で計画した事業についてできない部分がでてきている。」

事務局「詳しくは事務局担当者（以下、担当者）から説明がある。」

担当者「それでは会議次第をご覧ください。本日はまず協議会が止まっていた間の報告として平成29年度、平成30年度の事業報告を行う。その後、令和元年度の間報告を行う。令和2年度の事業計画案として見学者が安全に教育林の中を歩いて回るために必要な整備及びコーディネーターという専門家が抜けてしまった状況でどのようなレクの森の活用が可能なのかという事で提案をさせていただきたい。」

担当者「それでは会議次第を捲ってください。報告1、平成29年度の事業につきましては平成29年度の連絡協議会が終わった後に開かれた事業について報告する。平成30年2月4日、レクの森を歩くスノーシュー体験を行っている。小学生1名、保護者1名の参加だった。報告2、平成30年度の事業計画に移る。平成29年度の連絡協議会で示されたものがどのように処理されたのかを資料に乗せている。未実施の事業はコーディネーターが中心となっている事業。29年度の案に無かったものとして、雪でつぶれた東屋の撤去工事がある。廃材は修繕に再利用している。」

担当者「令和元年度事業の中間報告に移る。コーディネーターを中心とした事業については平成 30 年度と同様、手をつけることができなかった。その中で、見学者の安全を第一に優先することを目的として事業をおこなっている。まずはヒグマの出没とその対応について説明する。今年度は教育林に入林禁止期間を設定した。ヒグマの出没が多発したためである。その頻度は平成 30 年度は 1 回だった痕跡が令和元年度では大きく増えている。ヒト及び物への被害は発生しなかった。次に小沼の木橋について説明する。令和元年度から想定していたよりも木橋の損傷が激しかったため、使用を禁止した。当初予定していた予算では修繕ができなかったため、令和 2 年度に修繕をする計画で動いている。担当者が現地と一緒に見に行き、破損箇所を確認している。木橋の破損率が予算を上回った件について、木橋は壊れた部分を順番に交換していくという工事を行っている。今年度は取り換えなければいけない部分が多かったということが理由。」

担当者「次に遊歩道の草刈り業務について説明する。草を刈る範囲は設定している遊歩道に沿って全域を草刈りしている。草を刈る前に代表的な植物が無いか目視で確認している。全域を草刈りし、人がすれ違える幅を確保した理由は教育林の見回り、木橋整備工事の資材運搬を行うときに危険性が無くなることを目的に草刈りを行っている。目視で植物を確認したうえで、安全を確保するための草刈りを行っている。例年 2 回だった草刈りを 3 回に増やしている。見本林の草刈りは 2 回行っている。他の業務は小沼以外の 9—10 番間の木橋の修繕を行っている。また、倒木の処理も 3 本行っている。」

担当者「事業計画案を報告させていただきたい。コーディネーターが不在となっているため、平成 30 年度以前に計画された事業については、一時休止とし、令和 2 年度にかけて見直しを行いたい。コーディネーターが新しく見つかった場合は協議、引継ぎの体制を整えて、そうでない場合はどのような形でレクの森の活動ができるのか、実現可能な具体的なプランとして提示したいと考えています。」

担当者「令和 2 年度の事業計画案について説明する。コースに組み込まれている倒木について処理することを考えている。コースを上への倒木について乗り越えて進む、潜って進むと看板で指示が出されている。子供、お年寄り、荷物を持っている人を想定した時にケガをする危険性がある。また、木橋の修繕業者から資材を運ぶ時の妨げになっているという相談が出ている。見学者の安全と教育林の整備に大きな支障をきたすため、伐採して処理することを考えている。」

担当者「次にコース内の整理について説明する。見学コース内には現在地を示す地図板、案内のための小看板が設置されている。地図板の中に現在地の表示が無いものがある。清掃をした上で現在地をシールで示すことを考えている。小看板には道に迷わせるような分かりにくい表記がある。」

会員B「教育林内を歩いているので、看板の不具合には気が付いていた。いつだれが直すかということが分からないままになっていた。看板はコースとの一貫性をもって見直しが必要だと思う。」

会員A「協議会の最初から私も問題意識を持っていたが、直らなかった。整備事業の策定委員会で看板の案を出したが、その時には既に決まっているということで意見が採用できなかった。」

会員B「毎年言っていて、迷った人も何人も居る。見学者は看板を見て歩く。」

会員A「迷う場所が一番奥なので（保護管理計画による）ゾーン分けからすると知識がある人が行く場所なので、これまであまり話題にならなかったが、以前、子どもが行方居不明になる事故があった。子供が迷い込むことも想定しないといけない。」

担当者「見学者の安全にかかわる部分なので、担当者として修正する必要性を感じている。この資料は教育委員会として資料を提示している。看板の素材や本数など、コストに係る部分については細かく検討していかなければならないが、教育委員会としてはこのような問題意識をもって、令和2年度から整備を考えていきたいということを考えている。」

会員A「協議会が5～6年前から1回しか開かれていない。協議会が主催して教育林内の散策等を行い。問題意識を共有したい。写真の資料ではなく、草刈りの前や草刈りの後に連絡を貰い、それを受けて視察及び提案を行いたい。今後やっていただきたい。」

担当者「前任者等から情報を集めた上で、適切な方法を今後、考えていきたい」

担当者「コースの見直しについては令和2年度にいきなり看板を設置するということでは無く、調査を行った上で必要な看板数や設置位置を確認する時間を頂きたい。ただし、地図板の現在位置についてはシールですぐ対応できるので、早急に直していきたい。」

担当者「小看板について前任者に確認した所、設置してから10年は経過しているとのことだった。小破については見つけ次第修繕しているが、看板を支える杭が腐食していて、地面に刺さらないというような経年劣化もある。今回は看板内容の修正と経年劣化を同時に修正する意味がある機会だと考えている。」

担当者「破損のパターンにはバラつきがあるので、一気に取り換えることは考えていない。新しい看板を作ることになった場合は現在立っている看板に寄せたデザインで作り、まだ大丈夫な看板と合わせて活用することで考えている。」

担当者「森林展示館からヒバ爺さんへ向かう道の途中にぬかるみがあり、スニーカーで来た人が引き返してしまうので対策を考えてほしいという相談が森林展示館の管理人からあがっている。ぬかるみの対応策はいくつか考えているが、適切な方法を選ぶために令和2年度の5、8、10月等、水の多い時期、観光シーズンにぬかるみの度合いを調べて、対策を検討する。」

担当者「小沼の木橋工事については、令和元年度事業中間報告の通り、改修を検討している。また、10月後半に教育林内の見回りを行い、他の木橋についても状況を確認している。」

担当者「最後に教育林活用への協力をご覧ください、今年度、専門のコーディネーターが居ないということもあり、教育委員会としてイベントを開くことはできなかった。その中で、木村まさ子さんに教育林の中で自然観察会を開いていただけた。教育委員会として、コーディネーターが見つからない場合でも可能なイベントの方法を検討したいというのは冒頭に話させていただいた通り。加えて、このような教育林を活用するイベントについても周知や林内の情報提供等の面で協力できると考えている。」

担当者「平成30年度以前とは状況が違っている中で、できることを検討していきたい。これで説明を終わります。」

会員A「ヒバ爺さんへ向かう道のぬかるみ対策について、具体的な場所はどこか？」

担当者「森林展示館からヒバ爺さんへ直接向かう道の間中部と休憩小屋があるA沢の横」

会員A「そんなところがぬかるむ？」

担当者「ぬかるむ」

会員B「スギ林のところでしょ。なんであんなに水が出るのかと言ったら、実は川の工事をやったからなんですよ。砂防ダムが上にあったでしょ、その下のところから森林展示館の横の川の三面張りの工事をやったのね。要するに水を多く流すために、必要だって。その工事をやった時にヒバ爺さんに向かう道も木杭で川底を下げた。そのせいで、山の水を引っ張る川になった。あの工事をするまではそんなに水がある川じゃなかった。結局、山をいじることで何がどうなるかということは計算できることと計算できないことがあるけども、あの部分をぬかるまないようにするのは無理じゃないかな。」

担当者「考えられる方法については、水が地面下に浸透しないことが原因と考えられるので、砂利敷きになっている部分を重機等で下げて、下に生えている草や泥を取り除いてまた元に戻す方法。砂利を盛る方法。丈夫な台をぬかるみの上に置いて、その上を通ってもらう様にする方法などがある。」

会員B「そんなに不自由かい？」

担当者「見学者が途中で引き返してしまったという報告がある。」

会員B「じゃあ、例えば水が沢山出る時期とか、そういう時期に合わせて、こういう時期だとここは水が多いですよというお知らせを出せば、ヒバ爺さんに行くのにそっちの道を行かないで、入り口から行けば良いんですよってお知らせしてあげるとかね。そういう意味ではヒバ爺さんに行くには二つのコースがあるし、さっき言ったヒバ爺さんの横の休憩小屋もぬかるむんだよ。あれはなんでかという、A 沢の工事をした後だから。もともとあそこは湿地で水がいつも出ているところ、あそこはくぼ地で両側から水が出るので冬でもジクジクしてた。あそこは長靴ではないとヒバ爺さんにいけませんよって場所だから、A 沢の工事をした後はあそこをえぐったためにもっとジクジクしてしまった。あそこのジクジク感をとりたいというよりは、そこを通るんだったら長靴だよというように、急斜面にはいったらそこはもうぬかるまないから」

会員A「管理計画造った時に図面作ったんですよ。前担当者が、ゾーン分けしたというのは知っています？」

担当者「知らなかった。」

会員A「管理計画の中に書いてある。ちょっと今、資料ないんですか？」

担当者「確認していません」

会員A「ないんですか？ちょっとまって、それ重要ですよ。」

会員A「そこに初心者が歩くコースとちょっと上級の人が歩く危険が伴うところと、本当に危険が伴うところの三つに分けてある。」

担当者「危険性だけ知らせて自己責任で歩くというところがある？」

会員A「そう。見本林は誰でも入れるように草刈りも木の伐採も行う。安全に歩けるように保証しますよというところ、その他のエリアは自然観察会にも使うというところで、そのまま残すということになっている。一番上のレベルは登山の準備しなきゃだめだというところなんです。このヒバ爺さんは一番上級者コースなんです。それなりの覚悟をして行くところなんです。それは、教育委員会が周知をする。雨の時期にぬかるむのは普通。」

担当者「引継ぎで直接、その資料を貰ってはいなかったが、過去の議事録の中からそのような概念があったのは確認していた。もちろん、教育委員会として、半袖半ズボンで入るようなことを奨励するようなつもりは無い。教育林は観光にも力を入れている。その中で、登山用のスニーカーであっても、ぬかるみを見て躊躇してしまう人、車で来るような人も泥で車が汚れるのを嫌う人が居ることを想定している。また、その様な人への周知方法について、厚沢部町のHPを見ていただける場合には良いが、観光ガイド等でもレクの森が紹介されている。文字制限の中で、十分な情報を伝えられないことがある。入林に当たって、装備を整えることは前提としたうえで、装備を整えてきているのに心理的な障害で入林を躊躇する人を減らし、女性、子ども、高齢者が大回りをしなくてもヒバ爺さんにたどり着けるようにするなど、幅広い利用者を想定する必要があると考えている。」

会員A「その考え方は2001年から始まった策定事業の考え方なんです。誰でも入れる明るい森にしようとして、凄い工事が行われた。なので、すんでのところで止めたんですよ。」

担当者「大きな工事ということは考えていない。」

会員A「基本的な考え方について言っている。策定委員会が2年間あって、専門家が入ってきて話し合っ、そういう整備事業の考え方はおかしいねってなったんですよ。なので、あなたの考え方は全く逆行してるんですよ。」

担当者「その時に問題になったのは自然環境を壊すような大きな整備が問題に……」

会員A「考え方のことを言っている。」

担当者「考え方という具体的にどの部分のことか教えていただくことは可能か。」

会員A「町のホームページを観なかったとか、長靴を持ってこなかったとか、そういう人たちが、こういう危険なところを安全に歩けるようにしたいということでしょ。」

担当者「危険ということでは無く不便……」

会員A「整備事業の時もヒバの会の人たちがそういう整備をしてくれってということでそういう整備になったんですよ。全く、同じ考え方ですよ。要するにハイヒールで来た。バスで来た。バスで観光に来た人達が自然のことは全く知らないけれども、上のヒバ爺さんにも上げてあげたいと遊歩道を整備してあげたいということで、本当にきれいに整備をしようとして、チップまで敷いて、草を抑えて、ハイヒールで歩けるようにしたんですね……」

担当者「いえ、私はハイヒールということは言っていないですよ。あくまでも登山用のスニーカーで準備をしてきた人でも、ぬかるみが大きくなった時に気持ちの面から引き返してしまうことがあるという話をさせてもらっている。」

担当者「それは確認していただいていますよね？」

会員A「常識で考えて、ぬかるみは中に入らないと体験できない物なんだよ。それが自然林の目的なんだから。」

担当者「今回のぬかるみは自然に由来するものではなくて、自然を大きく変える工事をしてしまったため、副作用で出てきたある意味不自然な物ですよ？そして、その上にひとつ台を乗せるというのはそれ以上自然をいじることなく、本来通れたわけですからぬかるみが無くて…」

会員B「いや、あそこはね、そもそも砂利道だし、作業道なんだよ。あそこってというのはね教育林の一部であって、部外なの。わかる？教育林っていう自然の形態を残しているエリア、これは森の入口から、ヒバ爺さんのこっちから砂利道を行ったところから、あのエリアだけが教育林としての自然の形態が残っている部分。それは分かるでしょ。」

担当者「はい」

会員B「一番最初に森の入口まで行く砂利道。私はあそこが一番きれいなんです。なんかという、その整備をするということで、あの道を舗装するということを最初に言ったんですよ。」

担当者「その話は把握していませんでした。」

会員B「要するに救急車が、中で、誰かが怪我でもしたときに、救急車が入れないと困るといった自然監視員の方が居たので、そんな教育林の中でそんな事業をする意味が分からないようなことが過去にあった。しかも、ヒバ爺さんの入口のところを間伐するという計画もあった。その時は厚沢部町の役場に営林署から出向した方が居たんですよ。この山のヒバ爺さんの入口の山を間伐するって、そして、陽の光を入れるって言ったんです。その場所というのはさっき言った入口のところで、細く削られていつもジクジクしているところ、そこから左側の急斜面をジグザグに上がっていくところがあるんです。あそこのエリアの間伐をするといったんですけど、保水力が無くなり、大変ですよという話を担当の人としたので、止まったんですよ。入口の砂利道も舗装するなんて無謀ですよってことで途中で終わっているはずですよ。」

担当者「舗装ということは考えていない。」

会員B「経緯の話をしている。第2見本林のところにも段差がついているでしょ。」

担当者「ついていますね。道を付けるときについたということか。」

会員B「そうです。砂利道を整備する時についたんですよ。あの段差が付く前はもっともっと歩きやすい入口ってというか展示館の前から入っていくもっと優しい道だった。ただ、一定の斜度で一定の道にしたことで、石は玉砂利だから足の裏にはとても歩きづらいんですよ。中に、板根といって、とても珍しいものだから、そこだけ残してくれって、その時の工事の担当者に言って残ったエリアなんです。根の左側を歩く元の道がかろうじて残っている。だから、ひとつひとつの手を入れるということについては、あの森は手の入れて良いエリアと本当に生態系が残っている370年の歴史のエリアと分けて考えないといけないんですよ。そここのところが基本です。」

会員A「まだ質問したいところがあるので、宿題として。担当者は管理計画すら見てないと、策定委員会報告書も読んでないと。過去の資料は読んでないんですか？」

担当者「過去の資料は読ませていただいているが、製本された完成資料は読んでいない。策定に係る過去資料及び議事録は見させていただいている。」

会員A「その、提案なんですけど、あまりにも素人じゃないですか、初めて来て資料すら読んでないし」

担当者「いえ、過去の資料は読ませていただいている。」

会員A「理解してないでしょ。理解してます？」

担当者「それはぬかるみの部分ということですよ？」

会員A「これまでの2003年に事業中止になってからずーっと16年間、議論してるんです。考えの流れが分からないとね、突然こんな事業やるって言われてもね。頭の中で作った事業をやると言われても困るんで、提案として来年春にでもね観察会を兼ねて関係者のみんなで歩く機会を作ったらどうでしょう。勉強会として。そうすると実体験として意味が分かるってことですよ。それぞれのね。工事の跡とか見て。歴史も勉強できると、これはいくら口で言ってもわからないから。今回、木村マサ子さんが来たけど、それに出てくれれば、良かったんです。そういう機会をいっぱい作って、一年間勉強したらどうですか。」

担当者「今、私の立場から、この場でやりますとお約束することはできないが、議事録を作る中で提案があったことを報告し、検討する。」

会員A「イベントへの協力という内容があったが、町外の人を呼んで盛り上げようということなんですが、来年は担当者さんのためにも、協力しますから、また、木村マサ子さんにもお願いして、あの人は自然観察教育のエキスパートっていうか 1980 年代から、昔、函館公園の係だった人なので。あの人に教えてもらった方が良いと思いますよ。考え方が一番大事なんだから。」

会員B「コーディネーターももう一回なんとかしてもらって」

会員A「考え方が大事なので、道をこう直さないとなんて後で良いんだよ……」

担当者「すみません。具体的な手段として、いくつか例で考えているということで提示させていただきましたけど。譲れない部分の一つあるのが、見学者が安全に歩くことというのはレクの森という性質上必ず守らなければならないんです。この部分に関しては教育委員会の立場として、お譲りすることはできない。」

会員A「それはね、ずーっと議論してきて、ずーっとやってるんですよ。貴方が初めて直面している問題じゃないんです。過去、我々の民間の力が弱かった時には一方的に乱暴な工事がそうしてなされたことがあったんです。ところが、事業が条例違反でストップしてからは、ある程度常識に戻ったんですよ。それが、今回のコーディネーター不在をきっかけとして、それを効率としてかもしれないですけどね。穿った見方として、こういう風に工事がまた頭をもたげて来たという状況。」

担当者「そのような工事は考えていない。」

会員A「我々は工事だと思ってますよ。」

会員B「そうだ、あのピンクテープって何？ 担当者に聞こうと思ってた。」

担当者「教育林内の木についているピンクテープですか？ それは倒木についている物に関しましては……」

会員B「倒木じゃなくってね。細いやつの、散策路のペッペッって、数字書いてあるんだよ。」

担当者「事務局で付けた物ではない。巡視員の報告で以前、その様な物があったのは確認している。関係機関に問い合わせたが、由来が分からなかったので、一度除去している。」

会員B「観察会の時、ついてたよ。」

担当者「その場所は分かりますか」

会員B「普通に歩いてたらついてたよ。去年の春もあったんだよ。」

会員A「特に激しかったのが、ヒバ爺さんから小沼に行く途中。林務係がつけたのかもしれない。」

担当者「引き続き、注意し、どこの機関がつけた物か調査する。林務係ではないことは以前に確認済み。」

事務局「いろいろ、考えられる団体に聞いてみたが、分からなかった。」

会員B「そういうのも、教育委員会に言ってくれればいいんだけど、誰がつけたのか分からないと困る。」

会員A「先に行きましょう。」

会員A「小沼の木橋工事ね、計画しているのでは今見積もりはいくらですか？」

担当者「おおよその数字でもよろしいですか？まだ、外に出している物ではないので、正確な数字はお答えできない。例年、100万円前後だという過去の議事録でも出ている数字ですが、それよりやや多くなることが予想されています。」

会員A「毎年、やってましたよね？工事。コーディネーターが居なくなっても工事をやっていますよね？」

担当者「はい、行っています。」

事務局「落ちている奴は直して……」

会員A「いつもよりペースが速いということですか？腐るようになっている。」

担当者「いえ、今回は、一気に修繕しなければいけないところがきてしまったということです。」

会員B「草刈りっていくらかかっているんですか？回数増やしたでしょ。3回にね。」

事務局「100万ぐらいじゃないですかね。」

会員B「一回 30 万円ちょい？」

事務局「大体、そんな感じだと思いますよ。」

会員BW「工程は写真見させてもらって、歩いているときにもこれは草刈りやってるねって見させてもらってわかったけど、あんまり、良く分からない。」

会員A「写真見させてもらって、三回目の草刈りが全然必要じゃないんじゃないかと思って、あの見本林の奥を刈ったのは分かるけど、あそこは人が歩かないところだし、あそこ刈ってどうすんのと、10 月の半ばだよな。」

担当者「10 月の 10 日ですね。」

会員A「立ち入り禁止の時期だよな？だってクマの閉鎖が解かれたのが 20 何日だから」

担当者「そうです。入林禁止期間です。」

会員A「だから、このまま閉鎖かなって時期に草刈ったんだよ。だから、これ意味ないんだよ。だから、なんでこんなことするかっていうと、議会で決まっちゃったからでしょ。」

担当者「当初予定していた事業なのでやったということではあるが、本来ならば、クマが出ない場合には入林禁止を直ぐ解除することを考えていた。まず、基本的に見学者が森の中を 11 月でも歩けるような状況にすると設定していて、計画では、10 月の頭に草刈りをする事としていた。ただ、その中でクマの出没と業者の予定があって、実施日時が 10 月 10 日になった。全く無駄な草刈りしたということではなくて、有効に生きる筈だった草刈りが、クマの多出没というイレギュラーな状況にかかってしまった。そして、草刈りを行ったことでクマの痕跡確認が有効になっている。また、草刈りを終えた状況の中で、業者と破損した木橋の確認に行っている。倒木の処理についても見学者の少なくなった 11 月の末に行うことを考えれば、見学者だけではなく、来年度の整備も含めた教育林全体の環境を見ていくためにも必要な事業だと考えている。」

会員A「去年までは 2 回でした？ 3 回でした？」

担当者「去年までは 2 回でした。」

会員A「ずっと 2 回ですよな。コーディネーターが居たときは 2 回ですよな。」

事務局「コーディネーターが自分で草刈りをしていた部分もあるが、2 回だった。」

会員A「だから、普段だったら、コーディネーターというか責任者が居て、見回りをして、必要だと思ったら、もう一回、3回目ということを考えていたんですよね。9月の補正議会で」

事務局「そうですね。」

会員A「それで、10月頃やるということにしてるんですよね。」

会員A「コーディネーターがやっていたときは、私たちも行っって手伝っていた。今回、なんでこうなっちゃったか良く分からない。6月の議会でこの話が出て、9月の議会で決まったわけでしょう。」

事務局「当初……」

担当者「いえ、これは当初予算に計上されている。」

会員A「え？そうですか」

会員B「なんか要望があったんですか？」

会員A「議員さんが3回やるべきだって言って決まったんだよね？」

担当者「それは平成30年度の議会で出てきたという話でしょうか？」

会員A「いや、6月だったと思う。」

会員A「管理計画にもあるように、原則2回なんですよ。後は、コーディネーターが判断すると。それを議会主導で変えてしまっているというのはどういうことですか。」

事務局「議会主導というわけではないですけど、全部の路線で3回行っているわけではない、2回で済む部分もありますし、3回入らなければならない部分もある。委託の延長とすれば全部含めてますけども、2回しか刈ってないところは実際ありますので、後は現場を確認しながら……」

会員B「2回しか刈っていない部分があるのか」

事務局「コーディネーターが居なくなって草刈りが十分いきわたっていない部分もあったので、教育委員会も直営でやれない時もありますので、委託して、年間1千人ぐらいの利用者がおりますので、その部分は安全に入ってもらえるように、利用者のことを考えて、最大3回やりますかっていう。まあ、2回で済んでいる草の生えづらい場所もありますけれど。入林者の安全と利便性、クマ等の痕跡も分かりやすいですし、そういう部分も含めて……」

会員B「クマ糞を気にしている割には溶けてしまって無いような部分に看板が立っている。落ちている看板もそのままだし、誰が、あの看板についての管理の責任があるのか、思うぐらい乱立している。」

会員A「そうですか？」

事務局「そうですね」

会員A「そうでしょ」

事務局「教育委員会がキチンと管理して、撤去や設置を行う」

会員B「そういう意味では、教育委員会の皆さんはレクの森の専属ではないから、だから、私たちに一緒に歩いてくださいよとか、この看板どうですかねと言ってくれたら、その現場一緒に見に行きましょうよとかいうような連携はお互いのスケジュールを合わせれば、とりたいて思ってるし、そのための協議会だと思っている。だから、全部をなんでこんなことになっているという気はサラサラなくて、結局、草刈りだったり、ここってやっぱり必要だよなって協議をした上で、業者さんに今ならお願いしましょうよとか、なんで、そういう流れを作っていけば行けるのにやらないのか。忙しいからなのは思うけれど、そうすれば看板だって、こんなに後回しにしなくてもいいし、道に迷ったっていうお客さんも沢山いるし、倒木についても凄い楽しめる倒木もあるし、本当に危ない倒木もあるし、倒木も一つのくくりでは考えられないし、安全というのは何が安全なのかという、じゃあアスファルトにしたら、本当に安全なんですかという。アスファルトで転んだって骨折はするし、むしろそこに、枯れ草がフワフワになってたら子供は怪我しないわけですよ。そういう意味での安全の定義というのは私たちはずっと考えているから、担当者にも一緒に考えて貰いたい。ぬかるんでいるのが安全じゃないという位置づけにはならないでしょう。その辺がもっともっとお互いに話をしていかないと、考えていくポイントだと思いますよ。」

会員A「あと、2つ質問があるんですけど、もともと協議会というのはいろんな部署の人が集まって、連絡協議会をしましょうよということをやっていた。縦割りじゃなくて、教育林活動においては色んな人が集まってルールを共有しましょうよと、なのに、誰も出てこない。分かります誰の事を言っているのか。関係者って他にも居るでしょ。」

担当者「それは、すみません。具体的には。私が以前の形態について分からないところもあるので」

会員A「協議会が始まった時は、他の方が10人ぐらい出て来たんですよ。教育委員会の人と林務課の人と観光課の人と、今まで縦割りだったけれども、そういう関係者が集まって、共有しましょうよと現実、ここ5～6年は教育委員会は2人、連絡協議会は3人というような状況だった。1年に1回、行政が決めたことを此方が聞いて質問するだけで終わってしまう。だから、何も進まない。本来はそうではなくて、本当は策定委員会で決まったことは、権限を持った委員会にしましょうよと、そこがリスク評価をして、ルールを決めて、役場の教育委員会がリスク管理をしますよと、分かる？リスク評価とリスク管理を分けるべきだという考え方。それで始まったんですけど、前担当者が協議会を作った時に、僕は策定委員会で決まったように民間の人でも専門家の人を入れて、年に2回ぐらい、この委員会にしましょうよと、そこで決まったことは役場にやってもらうようにしましょうよと言ったんだけど、それは出来ないと、代わりに協議会を作った。それで、その機能は果たせるはずだと、連絡協議の仕事はそこでできるはずだという風に始まったのに、当事者が来ない。ただ、そちらから一方的に連絡を受けるだけで、それが積み重なってこういう風になっている。いくら現担当者が頑張ってもたかが知れているというか、もうちょっと元にもどしたらどうですか？最初の在り方に。誰が来ていないかというと役場の担当者が、教育委員会が来ていない。それから、民間の人も来ていない。策定委員だった人達も来ていない。もりもり倶楽部とか民間の団体とか、観光の案内をしている女性たち、まだお元気ですよ？」

会員B「今回連絡したんですよ？」

担当者「もりもり倶楽部とヒバの会については、もう参加はしない、今後も活動の予定もないとの連絡を受けた。」

会員A「それから、役場の人とは違うけれど、自然保護指導員、自然保護監視員、あるいは見回りをしている監視員の方、関係ないかもしれないけど森林展示館の管理人。関係者が誰も来ないんですよ。そういう風に元に戻してもらうようにできませんかね。それは我々の仕事じゃなくて、やっぱり主催者、コーディネーターの役割が教育委員会にあるわけだから、コーディネーター不在だからできませんなんて言えないわけだ。必要だったら雇わないと行けない。どうやったって雇わないと行けない。」

担当者「その点につきましては、担当者は具体的な整備の方法を提示するために資料を作らせていただきました。今のお話ですと、レクの森の本来のあり方を見直すという話ですから。主幹の方から回答させていただく。」

事務局「協議会として3人しか居ないというのは少なすぎるので、当然体制を立て直す考えでは居る。広く一般の住民を再募集するだとか、以前関わった人にもう一回声をかけてみるのか」

会員A「その話は毎年伺っていたが、全く変化が無い。どこか違うかと思うんですよ。根本的に。だってこのままずっとやったって同じに決まってるでしょ。」

事務局「参加してくれる人がということか」

会員A「この状態が。何も協議会に権限は無いし、参加していろんな意見を言ってくれる人も居ないし……」

会員B「観光の事業として、活用したいと思ってるんでしょ」

会員A「俺、本気なのかどうか疑ってるんだよ。全然本気じゃないじゃん。だってね、ちょっとね、もう一つ質問しようと思ったのはコーディネーターのことなんだけど、全然本気じゃないと俺は思っていて、何故ならホームページに募集が出ていない。そして、専門家が必要なんですよね。今まで2時間話していた中で、専門家が居れば全部解決する問題なんですよ。専門家じゃない人たちがばかりが集まってるからこういうことになるんですよね。今、公営塾があるけどさ、凄いと思うけど、先生が4人いるわけですよ。コーディネーターが4人いるみたいなもんですよ。上手く行くに決まっているんですよ。専門家ですもん。素人いないもん一人も。でも、この大きな、何億円もかけた事業が専門家がゼロなんですよ。公営塾って何億円ですか？教育林は買ったのは3億5千万円で工事が4億5千万円。年間何百万だから、凄いお金がかかっているのに、専門家が居ないっていうのはこれが一番の問題なんですよね。素人の集まりで、人事異動で、せっかく知識が蓄積した人が居なくなってしまう。また、我々はほっぽりだされて、0からスタートみたいな感じでね愕然としているわけですよ。今までなんだったんて話ですよ。先ほど、去年までの計画は白紙にして、やりませんかみたいな話をおっしゃいましたが、凄い話ですよ。私たちの今までのボランティアの時間はどうしたんだ。今まで調べものしたりだとか、勉強会を開いたりだとか、このために1歩1歩登ってきたのに、また地べたから始まるの、整備事業と全く同じじゃん。」

会員B「観光資源として町は、本当に必要だと思ってるんでしょ。だから、こうやって、安全に誰でも入れるような森にしたいと考えてるんだから、じゃあ、本当に観光の一つのネタとしてこの町が活用したいと考えてるなら、中身はとても沢山濃縮されてるんだから、後は、本当にこういう見世物があるしこういう出番があるしというのを組み立てて、それにスタッフを募れば、これ以上の観光資源は厚沢部町には無いと考えていて、担当者には悪いが、館城の復元とか事業計画言ってるけれどあんな不便な場所だよね、あそこまで行くのも大変なわけ。でも、ここの森は国道から直ぐなのよ。こんな立地っていうのは他に無いんだよ。この立地を活用して、専門家もお年寄りも、幼稚園もみんなよかったね、楽しめるねってこんな宝箱はない

んですよ。それを私たちはずっとこうやって、町と一緒にみんなの力を借りながら、みんなの力を借りながら、ここにしかないものだから、全国から世界から来てくれるねっていう夢を持って、ずっと今までかかわってきたわけ。ハイヒールは無いよって担当者は言うけれど、そんなね、長靴が汚れるとか、スニーカーが泥が付くなんて気にするようなちっぽけな視点では私たちは見ていない。そこのところを担当者と手を組んでやりたいと思ってる。それぐらいの性根を私たちは据えてるんですよ。そこのところをね、主幹はずっと長いから、分かっていたんだけど、いろんな担当の方にも分かってもらいたい。決してこれは自然保護じゃなくて、厚沢部町の宝を皆で共有したいんですよ。そのための素材があるんですよ。」

会員A「コーディネーターの募集の件なんですけどね、これなんとかしないといけないですよ。だって、これ解決すればほとんど解決なんですよ。平成28年度のコーディネーターレベルの人が居れば、全て、解決なんですよ。つまりね、そこらへんのレベルじゃダメなんですよ。求人広告のそのレベルではね、来るわけないんですよ。来てもすぐ辞めちゃうんですよ。知識で勝てないから地元の人に林業の人に、それに対抗できるだけの知識が無いとすぐ潰されちゃうんですよ。その人も、それが耐えられなかったのかもしれない。」

事務局「辞めた理由は分からない。」

会員A「僕は聞いていないけど、薄々は分かる。彼女の境遇がね。彼女はね大学院出てるんですよ。普通なら大学の教員レベルなんですよ。そういう人がもう一度来てもらえるようになんとかしないといけない。その為の、策を練ろうというのなら凄い有意義なんですけど、協議会は。それを無いことが前提に担当者は話してるからね、もうちょっと勉強して、その間にコーディネーターをなんとかして一緒にやっていくのがベスト。」

会員C「申し上げづらいんですけど、コーディネーターの募集をかけてくださっているので、大学の同級生とかで、研究職の人がおりますので、動植物関係の、ちょっといい人材を紹介してということで募集要項を送ってみたんですけど、専門性が高くてやりがいがあるって素晴らしい仕事だとは思いますが、この待遇だとブラックだと回答があった。待遇の部分を良くすれば、やりたい人が居るんじゃないかなと思う。北海道内では無いが、別の県で厚沢部町のような募集をかけた県がある。そこがブラックだったという話がある。業界では有名になって、厚沢部町もブラック案件だと思われてしまうというメッセージが友人から来た。人には紹介できないと言われ、私もガックリきた。」

会員A「あの業界は情報がちゃんと行き渡る。」

会員B「議会でコーディネーターの話がでたんでしょ。その話はどうなってしまったの？期待していたんだけど。」

会員C「その条件だと、半年ごとだときつい。やれる業務内容も多岐にわたっていて、色んな層の見学者も受け入れていたのに。そういう内容なら条件を良くすればやりたい人が沢山いる。というように友人からアドバイスを受けた。」

会員A「町長の臨時答弁に町の臨時職員の一般のレベルなんだっていう発言があった。それを乗り越えないと、特別職とかにしないとダメなんです。一年、何年契約とかね。環境省のレンジャー、あれも何年契約というのがあるんじゃないの。あれもちょっとブラックだといううわさがあつたけれども。」

会員C「レンジャーは5年契約？」

会員B「町としてはどのような観光資源として活用していきたいのか？」

事務局「そうですね、手前の道の駅の回収も進んでいくようですけど、それとリンクして人が入れるように手前の1時間程度のコースで、そういう身近なコース設定をしながら、入れ込み客を増やしていくんじゃないかなと思う。後は奥行くためには、それなりの準備をしていかないと。一般的に考えれば。」

会員B「エリア分けが必要ですね。その中で、目的を持った人が一人一人それぞれの目的をクリアできるような森にしないと行けないわけですよ。」

会員B「朝のラジオを聞きましたか？全国的にこの森は知られている。厚沢部町は予算ありきだから建物を建てても使い勝手が良くない。森ぐらいいは皆で使い勝手を考えて後世に伝えていきたい。」

事務局「例えば、これより先はガイドさんが必要ですよとかいう。全部が同じ条件で入っていくことができない。」

会員B「それが基本なんです。組み立てをするためには専門知識を持った人が必要。」

会員A「ホームページの歴史の年表があるが、誤りが2つある。これは毎年、前担当者に言っているが全然治らない。1807年留山解除、現担当者には是非替えてほしい。1807年の解除は限定的な解除。業者の要望があったため、一時的に解除した。原則、明治時代まで留山。1961年保安林指定解除、これ間違いですよ。保安林の指定の仕組みが変わり、道知事許可するように変わったんで、国の指定を解除することになった。今も全域保安林だ。この本に書いてある。」

担当者「資料の正確性を確かめないと足をすくわれることになるので、根拠を確認する時間を頂けるなら。」

会員A「宿題がいっぱいあったんですよ。平成 28 年度のコーディネーターが居なくなってしまうって、誰にも聞けなかったんですよ。ヒバ記念植樹とヒバ人工林の問題がまだ続いているんですけど、これを継続していただきたい。方針はもう決まっているんですけど、コーディネーターが居なくなったのでやってないんですよ。これは、過去の事業計画を観れば分かりますから。」

担当者「事業計画については、この場で私の方から回答することができないので、議事録の形で教育委員会に持ち帰らせていただきます。」

会員A「それしかない。終わってませんよということを確認しただけ。次、トドマツの母樹林がナンバーがとられてしまって、これは 2011 年のことなんだけど、元の母樹林の書類が林野庁から届いたのが、2016 年なんですよ。それをもとにコーディネーターが復元をしようと言ったまま居なくなってしまったので、これも是非続けていただきたい。それから、モニタリング、誰がもやってないですよ。凄い希少種が沢山あるので、これを毎年モニタリングしている。数年に 1 回、結果を協議会で確認している。ここ数年、滞っているんで、盗掘にあっているかもしれないので、来年の春から再開してもらいたい。これはコーディネーターが居なくても専門家を雇えばできる。3 年見てないわけだから、シメシメと思って、もうなくなっているかもしれない。これまでのデータがあるので、それを基に確認してもらいたい。」

担当者「事業に関することなので、事務局主幹に回答をお願いしたい。」

会員A「これは要望なので主幹からの回答は要らない。これまでの宿題があるので、来年度から一緒にやりませんかという要望。以上です。」

担当者「担当者の方から話をさせていただくと、以前から色々な問題が続いているということが分かりました。ただ、その中でそれぞれの問題をどの段階で解決していくか、考える必要がある。教育委員会として、どれだけお約束できるかも分類する必要がある。まずは、今回、議題として挙げさせていただいた安全に教育林の中を歩くための整備は令和 2 年度にさせていただきたいと考えている。コーディネーターの待遇やトド松の母樹林、ヒバの人工林、ヒバの記念植樹の事業などにつきましては、今回いただいたお話は教育委員会に持ち帰り議事録に纏めさせていただく。組織の体制や事業計画については担当者より上の判断に係る。主幹、今回はこのようなことでよろしいでしょうか。」

会員B「事務局はぬかるみの対策や木橋の修繕の工事を提案として決めたいということか？」

担当者「そうです。教育林の中のことについて、最初に挙げさせていただいた部分を教育委員会として来年度の計画実施させていただきたい。ただ、コーディネーターや組織の形態について

ては見通しがつかない部分があるため、これは議事録に纏めて提案があったという形で持ち帰らせていただきたい。」

事務局「A 沢のぬかるみは大規模な工事をやりたいということではないため、対策を考えたいということ。」

会員B「どのくらい、水が流れてるのか。私が通った時は道路の上面を水が流れているぐらいだった。川になっているのか」

担当者「直接確認したわけではないが、報告者の話だと雨の後は川の様になっているらしい。」

事務局「その場合は雨の日に現地確認に行ってみる。ちょっと掘るとか。大規模な工事をする予定は無いけれども……」

会員A「水たまりができるから良いかもしれない。言ったら危険だ。」

会員A「常識人としてはね、常識としては雨の日は滑るよ。ヒバ爺さんのところ行くと危険だよ。崖になっていて足元の装備なしでヒバ爺さんへ行くのは無理。子供がロープの手を離したら落ちてしまう。森の入り口から入る方がスニーカーでも行ける。」

事務局「そのようなときは注意のアナウンスが必要だと考えている。」

会員B「ヒバ爺さんを目指すのは分かるが、いきなり上がるコースは危険なコースなので、足元はしっかりする必要がある。その違いが分かったうえで、利用者に合わせたガイド提案するのが良いのではないかと思う。工事が悪いわけではないが、その工事がのちのち必要なものであってほしい。だから準備段階を踏んだ上でやってもらいたい。」

担当者「一例として、盛土等の話をだしたが、考えられる可能性として提示しただけで、土台をぬかるみの上に置くのがコストがかからない方法として有力だと考えている。したがって、工事にこだわるということはない。しかし、ヒバ爺さんへ直通する道を通れるようにすることと、その道を見学者に積極的に通らせることは別の問題だということはわかったので、それはコースの見直しということで協議会で議論を行いたい。」

会員B「それはお願いします。」

会員A「遊歩道をどうするかという話で遊歩道を整備しすぎると準備のできていない見学者が奥に入りすぎて危険だということがある。今では、コースの難易度に沿って難しいコースはわざと入りにくくすることが一般的なのではないか。ハイヒールやスニーカーで行けるようにすることは時代遅れです。」

担当者「あくまでも心理的な障壁を取り除くことが目的で、物理的に行けないところを行かせようということではない。装備としては十分に整えている人が、心情的に行きたくないと考えて引き返すことが教育林にとってもったいないことだと考えている。」

担当者「難関コースへ入りにくくする整備方法について、どのような事例があるか教えてもらうことは可能か。」

会員A「北大の遊歩道専門家の先生が厚沢部町に来たことがある。講演の記録があるので読んでください。2010年6月にその先生とレクの森を歩き、教育林はどこも直すところはないという話になった。役場の人だけが、素人でも歩けるようにしてほしいと工事をしたがっていった。」

会員B「この前の観察会も4歳の子供が歩いていた。」

会員C「子供が小学校に通っているが、レクの森に入る前は先生から長靴を使う様アナウンスが入る。このように注意する人が居れば事足りるのではないか。」

会員A「観光のことについて言えば、2010年に北大の敷田先生がエコツアーの成功例失敗例を話してくれた。黒松内、霧多布について整備事業によらないエコツアーが成り立つということをお話してくれた。厚沢部町はバスで連れてきて金を落とさせる道の駅中心の観光だが、今では時代遅れ。エコツアーは今の時代はインターネットを通じて、その人に合わせたツアーを組み立てて、ガイドが安全に体験させる。これをNPOがやっている。その収益は自然保護のための土地買収に使っている。水路などを作って町に還元している。敷田先生は民間の知恵やボランティアも入れて皆でその土地を良くしているという事例、都市部の観光客を取り入れた、公共事業に頼らない観光の方法を講演してくれたが、厚沢部町は取り入れなかった。その資料もあるから是非読んでほしい。」

会員B「この森が良いところだねと、癒された人も多くいる。医療の場所として使えるんじゃないかと思っている。」

会員C「他自治体の小学校なんかもきてくれている。」

会員A「資源はあるが、それを使いこなす人がいない。能力が高いコーディネーターがいれば人、自然、金といった資源を活かせる。エンジンとなるコーディネーターがいれば回っていく。公営塾に4人いるけどここでは一人で良い。短期契約ではない長期契約の専門職が居れば解決する。以前、毎月観察会があった時は、町から案内が来た。観察会に、せたな町や福島町から来るような関心の高い協力してくれる人が沢山いる。」

会員A「コーディネーターが居ないという前提で考えて貰っては困る。」

会員B「水が流れている写真はあるか。」

担当者「無い。」

会員B「私も注意してみしてみる。担当者に連絡を入れる。」

会員A「来年、複数回現場を見る機会を作ってはどうか、4月末、夏前、秋の最低3回開催して草刈りの状況を見ることが必要じゃないか。その時に共通の体験、将来像を共有できる。そこから始めたら？」

担当者「話し合う上で現状を把握し、共通の理解を作っておくことは重要だと考えている。」

会員A「来年は緊急性のあるところだけやることとして、検討が必要な所は1年間送らせてもいいのではないか。」

担当者「倒木に関しては、安全性を確保するために処理するようにと上司から指示が出ている。町として怪我人を出すわけにはいかないということがある。また、現地を確認した業者からも直接、倒木が邪魔になっているという相談が上がっている。」

事務局「維持管理は教育委員会の所管となっている。」

会員A「本来逆なんだよ。ここで、協議会で提案して町に予算をお願いするのが普通なんだよ。」

会員A「俺たちは必要ないよって結論だからね、順序逆ですからねというのは伝えてもらいたい。前もって、こういう問題があるよって確認して協議をするのが本来のありかただという要望を伝えてもらいたい。4月の山開きの時に関係者や町職員を対象とした観察会を企画して、現状を確認する機会を持って、協議してから予算をお願いするというふうにしてほしい。4月末に皆で歩いてその時にルールも確認する。その時に、今年は重点的にこれをやるから皆さん見ておいて、と言って年末に決めれば良い。協議会を年末1回の開催としてしまうと町の決定を承認するだけになってしまう。」

会員A「一年を通して協議会で検討していれば、業者が何か言ってくる、ちゃんとやっていると言って待ってもらえる。ところが一度だけだと、1年溜まった事業をここでただ承認するだけ。だからぜひ春にやりましょう。得意分野が違う人が皆集まればなんとかなる。」

会員A「こうなるとコーディネーターが最重要課題となってくる。半年契約では無理だし、若い人がここで育っていけるような状況にしないと行けない。大学を出た人がここで修業できるような状況にすれば人は来る。今は自然観察分野で人材不足になっていて、給料も上がったという話を聞いている。」

会員B「コーディネーターは私たちの知り合いからやりたいという人でも良いのか」

事務局「良い。」

会員A「一般の人が見れる HP に出せば、日本全国から興味ある人が来るのではないか。」

事務局「以前のコーディネーターも HP を見て来た。」

会員A「公営塾の先生はどう決まったの？環境教育の国の事業がないか、北海道に相談したら？最初、佐藤謙先生に相談したら、待遇がこれではと紹介してもらえなかった。そもそもコーディネーターと協力隊の要件が違う。優秀な専門家が欲しい。」

担当者「今回いただいた提案は教育委員会に持ち帰り、検討させていただく。」

事務局「教育長について説明がある。この協議会は前教育長が会長を代行していたが、制度が変わって教育長と従来の教育委員長の役割を兼ねるようになった。事務局に入ることはできない特別職という扱いになる。補助金が出るような時に出す側が貰う側に係れないということ。」

閉会